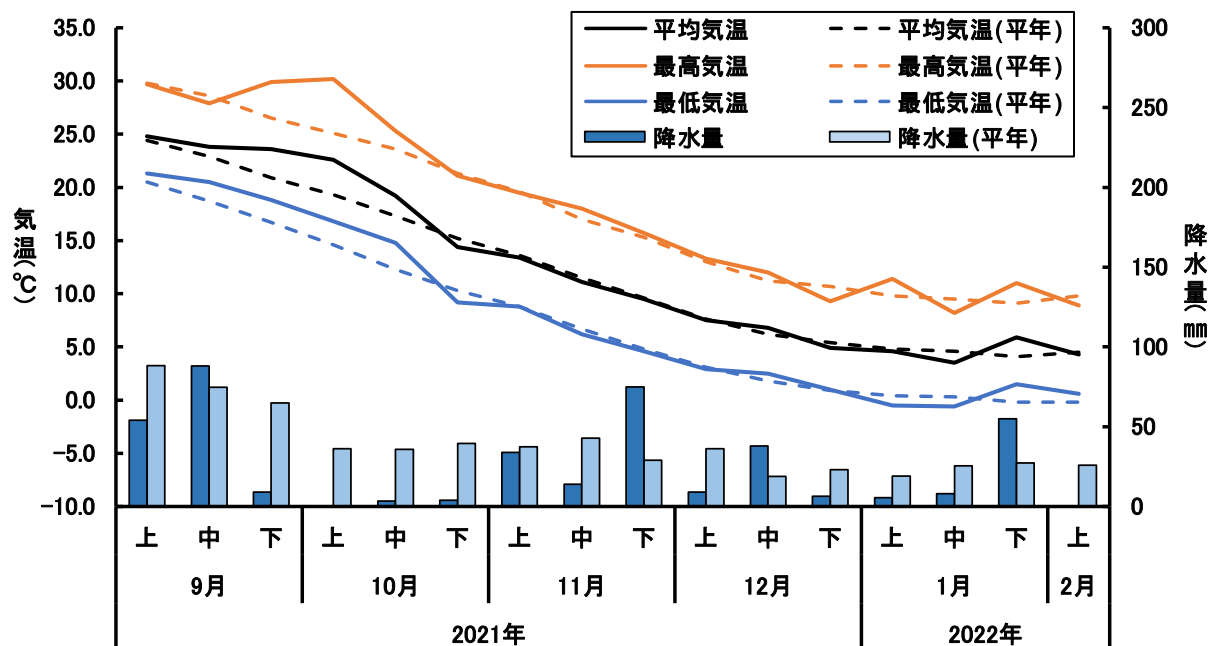


令和4年お茶づくり技術情報 (No.1)

2022年2月15日
佐賀県茶業技術協会
佐賀県茶業試験場

1. 気象と生育

1) これまでの気象 (2021年9月~2022年2月、嬉野市)



- (1) 平均気温は、9月中旬から10月中旬にかけて平年より高く推移し、10月下旬以降から現在まではほぼ平年並である。
- (2) 降水量は、9月下旬から10月下旬と12月下旬から1月中旬までの期間降水量が平年よりかなり少ない。
- (3) 秋芽生育期の8、9月は降水量が多く、徒長枝が目立った。9月下旬から降雨がほとんどなく、肥効発現、養分吸収が制限されたことで側芽の伸長が抑制された。
- (4) 現在の越冬芽は、やや膨らみかけた状態で昨年同時期とほぼ同じ大きさであり、昨年同様の越冬芽生育状況である (写真1、2)。



写真1 さえみどりの越冬芽 (昨年)
(2021/2/16 撮影、秋整枝 10/16)



写真2 さえみどりの越冬芽 (本年)
(2022/2/14 撮影、秋整枝 10/15)

2) 今後の気象の見通し

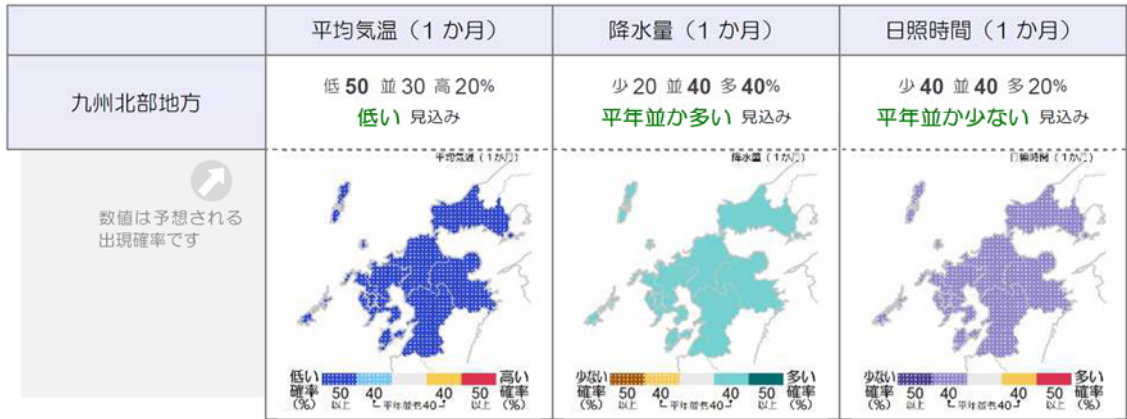
■ 1か月予報 (気象庁、令和3年2月10日発表)

向こう1か月の天候の見通し

福岡管区气象台

九州北部地方 (2月12日~3月11日)

1か月の平均気温・降水量・日照時間



- (1) 寒気の影響を受けやすいため、向こう1か月の平均気温は平年より気温は低くなる見込み。
- (2) 低気圧や前線、寒気の影響から、向こう1か月の降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ない見込み。

2. 今後の管理

1) 土壌・肥料

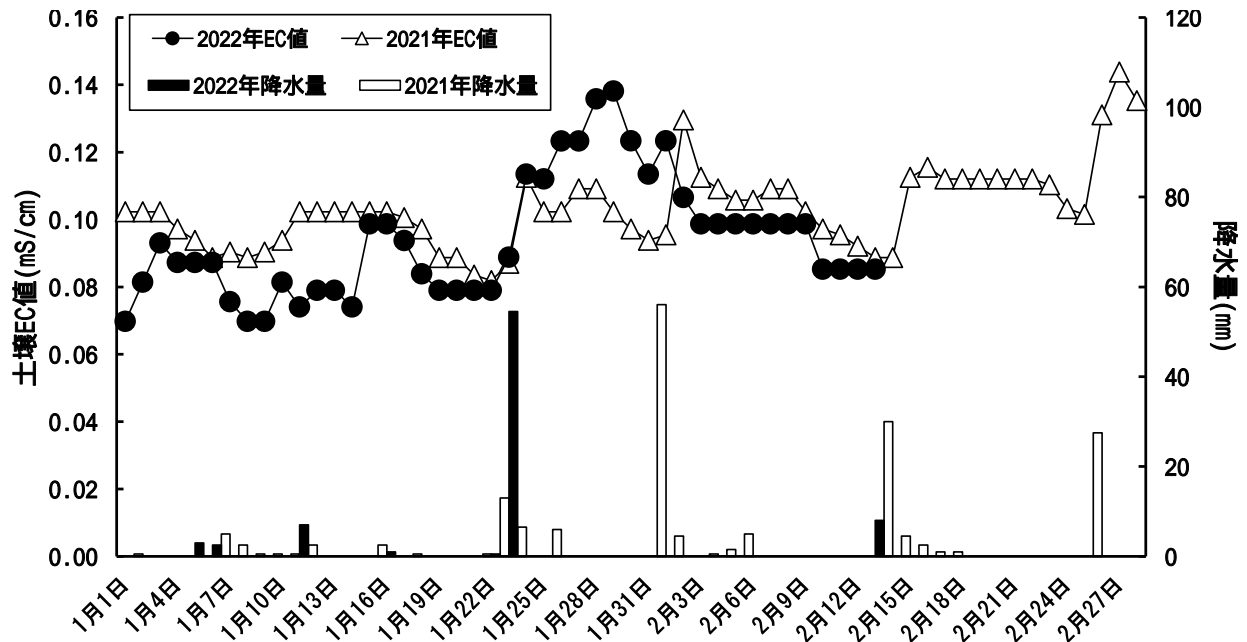


図 茶試作況調査園における土壌 EC 値の推移

注) 雨落ち部深さ 25cm 部分に埋設した土壌センサーにて測定し、実測値をもとに換算した値を示す

- (1) 土壌 EC 値は、1月下旬に 50mm 前後の降雨があったことから上昇し、昨年よりやや高く推移した。その後は横ばいに推移しており、2/14 時点では昨年とほぼ同程度となっている (上図)。

- (2) 今後の気温上昇に伴い、地温も上昇し、茶樹による養分吸収が徐々に活発となることから、3月上旬ごろまでには春肥を施用しておく（平坦部）。
- (3) 有機配合肥料は低温では分解が遅れるため、施肥後は浅耕を行い、土壌とよく混和することで分解を促進させる。

2) 整枝（化粧ならし）

- (1) 3月上中旬を目安に、新芽が秋整枝面より上部に出る前に必ず行う。
- (2) 新芽を傷つけないように、ハサミは秋整枝面より深く入れない。
- (3) 作業が遅れ、秋整枝面より新芽が伸び上がった場合には、やや高めにハサミを入れ、新芽を傷つけないようにする。
- (4) 再萌芽した茶園の対応策
 - 再萌芽した芽が開葉している → 化粧ならしで除去する
 - 再萌芽した芽が開葉していない → 秋整枝面より5mm程度上げて、出芽した芽を切らない

3) 防霜対策

- (1) 防霜ファンは萌芽2週間前からの稼働を基本とし、必ず早めに事前点検（温度センサー、首振り状態）を行う。
- (2) 防霜ファンの設定温度は茶株面で3℃（茶株面より樹体は2～3℃低い）を基本とし、過度に設定値を上げない（晩霜害の発生助長やランニングコスト高となる）。
- (3) 凍霜害の影響を受けた場合は、以下の対応策を参考に管理を行う。

生育ステージ	被害程度		対応策
萌芽期～ 2葉開葉未満			被害の程度にかかわらず、そのままにしておく
2葉開葉～ 4葉開葉	1)部分的で被害部と無被害部がはっきりしている場合		そのままにしておき、拾い摘み、または部分摘採を行う
	2)部分的で被害部と無被害部がはっきりしない場合	①被害芽率が低い場合	そのままにしておく
		②被害芽率が高い場合	被害部を除く程度に軽く整枝する
	3)被害が全面的の場合		被害部を除く程度に軽く整枝する
摘採期直前	1)被害が部分的の場合		拾い摘み、または部分摘採する
	2)被害が全面的の場合		刈り捨てて二番茶の生育を待つ

4) 病虫害防除

病虫害防除については、『令和4年度佐賀県施肥・病虫害防除・雑草防除のてびき』を参照してください。

URL : <https://www.pref.saga.lg.jp/kiji00321964/index.html>

